

先住民文化遺産／資源の表象

——中米ホンジュラス共和国の事例を中心に——

寺崎 秀一郎

はじめに

—アメリカ先住民とヨーロッパ世界との遭遇

遺伝子研究の目覚しい発達は、私たち人類の祖先が辿ってきてた道筋について、従来、私たちが考えていたものは異なる年代的なデータを提示しているが、アメリカ大陸こそが、人類が長い旅路の末、最後に到達した土地であることには変わりない。もっとも、チリのモンテ・ベルデ遺跡から得られた年代^①は遺伝子研究から導き出された年代同様、従来の「最初のアメリカ人」の到来時期について、いまだ再考の余地があることを示すものである。しかし、重要なことは、アメリカ大陸にやってきたごく少数の「最初

のアメリカ人^②たちは、まさに人跡未踏の地を南下し、その過程で各地に多様な文化を培ってきた、という事実であろう。その代表格が、メソアメリカのマヤやアステカ、アンドスのインカである。アメリカ大陸到達以来、各地に分散した「最初のアメリカ人」の子孫は、多様な自然環境に適応しながら、興亡を繰り返してきた。これはアメリカ大陸に限った出来事ではなく、過去、人類が足跡を残したところでは、同じことが起きていたわけであるが、アメリカ大陸における人類史の場合、その重大な転換点となったのが、クリストバル・コロンによる「新大陸の発見」と続く征服事業の開始であった。これほど大規模で組織的な文化変容を人類はそれまで経験したことがなかった、ということも過言ではあるまい。ヨーロッパ世界との接触がアメリカ

先住民社会に与えたインパクト、あるいはエンコミエンダ制に代表される搾取の過酷さについては、たとえば、よく知られているバルトロメ・デ・ラス・カサスの『インディアスの破壊に関する簡潔な報告』（染田秀藤訳、岩波文庫、一九七六年）で十分であろう。エドゥアルド・ガレアノはクリストバル・コロン以降の歴史を「収奪された大地」と称したが、Y染色体とミトコンドリアDNAの起源に関するデータが明らかにしたのは、まさにアメリカ先住民社会がヨーロッパ世界によって蹂躪されたという「生物学的遺産」であった。⁽⁴⁾これは単に「生物学的遺産」≡混血化というだけではなく、文化の存亡に関わる問題でもあった。アメリカ先住民はヨーロッパ世界との接触以降、政治的経済的、そして文化的に周縁化されていくことになるが、これは現在も解消されず、むしろ、二〇世紀末に加速した世界経済のグローバリゼーション化を通じて、アメリカ先住民をめぐる諸問題は拡大再生産されている。たとえば、一九九四年一月にメキシコ、チアパスで武装蜂起したサパティスタ民族解放軍（EZLN）から出された数々のコミュニティケの中にアメリカ先住民やメステイソたちの置かれた状況を端的に見ることができらう。⁽⁵⁾

一六世紀に端を発する異文化接触によって生じた歪な関係は、連続した時間であるはずの過去と現在を分断してし

まったのだろうか。アメリカ先住民の文化遺産／資源はどのように認識され、現代に生きているのだろうか。筆者は一九九二年以来、中米ホンジュラス共和国での考古学調査の実践を通じて、同国を含むラテンアメリカ地域の歴史的影響が考古学調査・研究のさまざまな局面において大小の事例を中心にしなから、国家の成り立ちやその帰結として、先住民文化遺産／資源がどのように表象されているのか、教科書や新聞報道などを手がかりにし、地域開発に対して先住民文化遺産／資源が果たす役割とは何か、考古学研究がどのようにコミットしていくのか等について考えていくことにし、これを「応用考古学」と呼び、⁽⁶⁾本稿を応用考古学の地域的な実践のための試論としたい。

1. 植民地から独立へ

一般にクリストバル・コロンによるアメリカ大陸の「発見」は一九九二年とされているが、実際にコロンがアメリカ大陸に上陸したのは、一五〇二年第四回目の航海のことであった。キューバ島を南向したコロン一行は現在のホンジュラス沖に位置するグアナハ島に上陸した後、八月一日、ホンジュラス北部トルヒーヨ近く（リオ・デ・ラ・ポ

セシオン川河口)に到着、一七日には領有宣言とともにアメリカ大陸最初のミサを執りおこなった。⁽⁷⁾しかし、スペイン人によるアメリカ大陸本土の征服事業は、ある意味では記念すべきこのホンジュラスから始まるのではなく、現在のパナマの地、サンタ・マリア・デ・ラ・アンティグア・デル・ダリエンからであり、⁽⁸⁾またメキシコからであった。つまり、スペイン人による中米地域における征服事業は南と北から始まることとなり、ホンジュラス地域は地理的には、ちょうどその中間に位置することになる。一六世紀、この中米地域において繰り広げられる征服事業の様相については、寿里順平『中米Ⅱ干渉と分断の軌跡』(東洋書店、一九九一年)に詳しいが、要約すると以下のようになるだろう。

南方からパナマ市を建設したペドラリアス・ダビラがコスタリカまで進出し、北からはアステカ征服で知られるエルナン・コルテスの部下であり、コンキスタドルとして悪名の高いペドロ・アルバラードがグアテマラ、ホンジュラス、そしてエルサルバドルまでを押さえた。しかし、この時期の征服事業は、まさにコンキスタドールによる領土争奪戦であり、端的に言えば、その結果に対して、スペイン国王がお墨付きを与える、といった体であった。結果的には中米地域は北からグアテマラ統轄領、ホンジュラス

統轄領、ニカラグア統轄領、コスタリカ・カルタゴ統轄領、そして、パナマという枠組みができる。特にホンジュラスでは現在の首都テグシガルパが先住民レンカの言葉で「銀の丘」を意味し、現在でもフランシスコ・モラサン県サン・イグナシオやサンタ・バルバラ県近郊では金が採掘されているが、一六世紀においてはサンタ・ルシア、セドロス、ユスカラン、バジェ・デ・アンヘレス(すべてフランシスコ・モラサン県)等で金や銀が発見されており、コンキスタドールにとつては魅力的な土地であった。そのため、この土地を巡って歴史上現れる人物としては、前述のペドロ・アルバラードばかりでなく、エルナン・コルテスやユカタン半島を支配したフランシスコ・モンテホ等の名前も挙げられるが、これらは1530年代頃までの出来事である。⁽⁹⁾

このわずか三〇年ほどの征服初期の歴史の中で、本来の住人であるはずのアメリカ先住民について、特記すべき事項は次の三点であろう。まず第一にコロンがグアナハ島で出会ったという「マヤ人」、⁽¹⁰⁾第二にホンジュラス初代総督であるディエゴ・ロペス・デ・サルセドの施策によって先住民人口が激減したこと、そして第三にホンジュラスの先住民集団の一つであるレンカの首長レンピラによるコンキスタドールに対する抵抗である。⁽¹¹⁾しかし、征服初期においては、専らスペイン人同士の領土争奪戦の記録しかな

く、彼らが出会ったであろうアメリカ先住民は搾取され、制圧される存在でしかなかったということを示している。

2. 中米連邦の誕生と崩壊

この征服初期以降の歴史について、寿里は「植民地統治はスペインから送られてきた総督の天下だったから、テグシガルパのリヨル市長（一五七八年）、グアテマラ市のマリアーノ・デ・マヨルガ総督（一七七三年）、一九世紀コスタリカのトマス・デ・アコスタ総督（一七九七年）など、スペイン人による善政（あるいは専制）者が長い植民地時代のなかにわずかに紹介され、そしていきなり独立前夜にいたってしまう」と記している⁽¹²⁾。植民地建設から独立までの間、大きな変革が起きたわけではないが、注目すべきは、植民地生まれのスペイン人、クリオーリョたちが次第に政治的経済的な力を蓄えていった、ということであろう。彼らが独立に向けての大きな原動力となったのである。この段階においても、アメリカ先住民は植民地から独立国家への道程の蚊帳の外に置かれていたのである。結果的には一八二一年にグアテマラ、ホンジュラス、エルサルバドル、ニカラグア、コスタリカは独立を果たす。この独立の延長線上、一八二三年に中米連合州（のちに中米連邦）が誕生し

たが、一八四一年には完全に崩壊してしまった。国土面積から言えば、最大のニカラグアでさえ一三〇、〇〇〇km²弱しかなく（日本の国土の三分の一程度に相当）、スペインによる植民地経営の結果として、小国がひしめき合うことになった中米地域において、連邦制による一国家の形成は旧宗主国をはじめとしたヨーロッパとの関係において、一定の政治的経済的意義をもつ可能性があった。しかし、当時の中米連邦内の保守派、自由派の対立によって、脆弱なものとならざるを得なかったのである。この短命に終わった中米連邦の歴史の中で、ホンジュラスの国家像形成において重要な役割を果たす人物が登場する。それが、ホンジュラス出身の中米連邦第二代大統領フランシスコ・モラサンである。フランシスコ・モラサンはカトリック教会を含む植民地統治体制の維持を目指す保守派を打倒すべく立ち上がり、改革を推し進めた。結果的にはこれが徒となり、退陣に追い込まれるわけだが、フランシスコ・モラサンの掲げた理想は、端的に言えば、ヨーロッパ世界に対する中米の自由と独立を守るというものであった。そのため、「中米連邦の父」と呼ばれることもある。中米連邦はその崩壊後も数度に渡り、再統合の試みがなされるが、いずれも失敗におわっている。しかし、現代においては、新たな経済的枠組みとして中米共同市場（CACM）が一九六〇年に

発足、一九九一年には中米統合機構（SICA）が誕生し、地域経済統合が進められている。このようにフランシスコ・モラサンの遺伝子は形を変え、現代に継承されているのである。だからこそ、ホンジュラス国民にとってフランシスコ・モラサンは国民的英雄であり続けるのである。ホンジュラス国民にとってフランシスコ・モラサンの遺産とも言える中米連邦への思い入れは強く、それは国旗の意匠にも現れている。かつての中米連邦を構成していた国々の国旗はすべて中米連邦の国旗に起源をもち、青と白からなるが、エスクードと呼ばれる国章に着目すると、たとえば、グアテマラ国旗のエスクードは、テクン・ウマンのエピソード⁽¹³⁾にかかわる自由の象徴ケツアルが交差する銃の上に止まり、それをオリーブが囲んでいる。エルサルバドルとニカラグアのエスクードは中米連邦のエスクードを継承しているため、酷似しており、三角形の中に中米連邦構成諸国を表す五つの山、平和を表す虹、自由の象徴である分離独立主義者の帽子が配置されている。それらに対し、ホンジュラス国旗にはエスクードはなく、星が五つのみであり、もっともシンプルなデザインになっている。ホンジュラス国旗に示される五つの星は、中米連邦再興の願望を表しているのである。しかし、中米連邦やそれに対する思い入れはあくまでもアメリカ先住民の社会や文化とは切り離されたクリ

オーヨ、あるいは現代においてはメスティソ主導の地域統合モデルであることに留意しておかなければならない。

3. 先住民文化へのまなざし

富と名声を求めてアメリカ大陸にやってきたコンキスタドーレスに、彼らの到来以前からその地で生活を営んでいた先住民社会、あるいは彼らの文化はどのように映ったのだろうか。

この点について、中米の場合、メキシコとそれ以外の地域では異なる様相を呈す。スペイン人の侵入時、現在のメキシコシティではアステカ（メシカ）の都、テノチティトランがアステカ皇帝モクテスマⅡ世のもと栄えていた。つまり、エルナン・コルテス一行は、アステカ文化の最盛期を目の当たりにすることになったのである。メキシコ湾岸ベラクルスから上陸したコルテスらは、アステカと対立するグループと戦い、和睦を結び、彼らの協力を得ながら、一五一九年、テノチティトランを目指すが、たとえば、その途中で立ち寄ったイスタパラパの町の様子を次のように述べている。「これほどの土地は世界中探してもこれまどこにも見つかった試しはない」、また、テノチティトランについては、「我々にしても目に入るものすべてにた

だ驚嘆するばかりで、お互いに言うべきことばも知らず、目の前にあるものが果たして現実なのかどうかも分からなかった」とテノチティトランの偉容に驚いている。⁽¹⁴⁾あるいは、モクテスマ二世の甥、カカマツインの「堂々とした立派な身なりはすっかり驚嘆し、この男にしてこれほどの威風を帯びるとするならば、このモンテスマとは一体どのような姿をしているのだろうか」と嘯き合⁽¹⁵⁾い、モクテスマ二世本人との謁見後は、「目も立派な目をしており、その風貌と人を見ると時の視線には必要に依じてやさしさも漂えば厳しさも感じられた」とモクテスマ二世の人品について感想を述べている。⁽¹⁶⁾モクテスマ二世とコルテスとの間に交わされた会話から、モクテスマ二世はコルテスを「充分な道理を弁え、その上武勇に長けて」おり、「深い尊敬の念を覚え」、一方、コルテスはモクテスマ二世ほど「卓越した君主が他に居ようとは思え」なかったという。⁽¹⁷⁾両者の間には少なくとも表面上は、いわば外交的要素を含む対等な関係が結ばれたのである。こうした二つの世界の出会いは後のメキシコという国家の建設においても重要な意味をもつと思われる。メキシコ在来の文化が自分たちのものとは異なるものであっても、洗練されたものであったことをスペイン人たちはよく知っていたのである。だからこそ、植民地から独立を勝ち取り、メキシコ・ナショナルリズムが

醸成されていく上で、「インディオ的な過去と現在は混血国家メキシコのシンボル」として為政者に利用されたのである。⁽¹⁸⁾

一方、メソアメリカと呼ばれる地域ではどうであったか。メソアメリカ地域の大半を占めるマヤ文明圏の最盛期は一般的には古典期（AD二五〇〜九〇〇年頃）とされ、ユカタン半島北部やグアテマラ高地を除けば、コロンに始まるスペイン人たちとの接触期には、かつての繁栄を記憶する者もなく、巨大な石造神殿群の多くは熱帯雨林に飲み込まれてしまっていた。そのため、ユカタン半島では、「ユカタンにはまことに美しい建物がたくさんあり、これこそ、インディアスで発見されたものの中で、最も特筆に値する。（中略）これらの殿堂はインディオ自身が建造したものであって、決して他の民族が作ったものではない」と記述されているが、⁽¹⁹⁾ユカタン半島以外の地では、そうではなかった。ホンジュラスに位置するコパン遺跡をめぐる記録から、外来者であるスペイン人にとって、マヤの文化、あるいは先住民文化がどのようなにとらえられていたのかを読み解くことができる。

コパン遺跡は、現在のホンジュラス共和国コパン県西部に位置し、一九八〇年にはユネスコの世界文化遺産に登録されており、隣国グアテマラの大河、モタグア川の支流、

コパン川右岸の小規模な沖積平野にある。「新大陸のアテネ」とも称され、マヤ世界でもっとも長いテキストである「神聖文字の階段」と呼ばれる神殿26をはじめとした石造神殿や凝灰岩を用いた高浮き彫りが特徴的な石碑などで知られている。このコパン遺跡がヨーロッパ世界にその存在が知られるきっかけとなったのは、一五七六年、グアテマラ聴訴院の聴訴官であったディエゴ・ガルシア・デ・パラシオがスペイン国王フェリペ二世に書き送った書簡においてであった。彼は現在私たちがコパン遺跡を前にして感じると同じく、そのすばらしさを讃え、遺構についての報告をしているが、それらの遺構を誰が残したものなのか、という点については、「この地の住人には作ることができなかつたであろう」とも述べている。²⁰その後、コパン遺跡に関する記述が現れるのは、一八三四年のことであった。中米連邦によって派遣された軍人ファン・ガリンドがコパン遺跡を訪れ、記録を残した。しかし、これらの記録はそれぞれ一九世紀後半、二〇世紀初頭までその存在は知られていなかったのである。彼らの訪問の後、一八三九年にはアメリカ合衆国の外交官であったジョン・ロイド・ステイーンブンスがイギリス人画家フレデリック・キャザウッドを伴い、同遺跡を訪れた。その成果は一八四一年『中央アメリカ、チアパス、ユカタンの旅の出来事』として出版され、

広く世に知られるようになる。その後、一八八五年にはアルフレッド・P・モーズレーが後のピーボディー博物館の調査につながる集中的な研究をおこなっている。ピーボディー博物館は一八九一〜九四年に調査をおこなったが、これはマヤ世界における最初の組織的な学術調査であり、マヤ考古学元年と位置づけてよいだろう。シルヴェイナス・G・モーレーは、上記のステイーンブンス、モーズレー、ピーボディー博物館の成果を高く評価しているが、このコパン遺跡をめぐる一連の経過は、まさにマヤ世界と外の世界とのかかわりを端的に表したものであるといえよう。つまり、同じマヤ文明圏にありながら、ユカタン半島北部やグアテマラ高地を除く地域においては、アメリカ先住民の残した「遺跡」は、一六世紀には「発見」、一九世紀には「探検」、そして、一九世紀末〜現在においては「科学的考古学」という視点からとらえられてきたのである。少なくともマヤ文明圏に残された多くのアメリカ先住民文化の遺産は、他者からのまなざしのもとに存在してきたのである。たとえば、ガリンドはコパン遺跡の周辺に暮らす人びとが古代のモニュメントの起源や歴史について無知・無関心であることに驚きつつ、「彼ら自身の国の歴史の研究は中央アメリカの人びとに、より洗練された愛国心とその特別な性質を与えるだろう」と述べている。²²しかし、ホンジュラスの場

合、二〇世紀になっても、コパン遺跡をはじめとした先住民文化遺産／資源の研究はカーネギー研究所をはじめとした「外国人」を中心に進められてきたのである。⁽²³⁾

4. ホンジュラスにおける先住民文化遺産／資源の表象

一六世紀以来、前述のような歴史的経過をたどった結果、現代のホンジュラスでは、先住民文化遺産／資源は高度に学術的な点はともかく、ホンジュラス国民の間ではどのように語られているのであろうか。そこに考古学的知見はどのように反映されているのだろうか。これらの疑問に答える前に、現代のホンジュラス共和国の概況について以下に示すことにする。

(1) ホンジュラス共和国概況

国土面積は一一二、四九二km²で、人口は約六六〇万人、国民総生産は九〇〇ドルであり、中南米地域の中でも貧しい部類に入るのであろう。主要な産業はバナナ、コーヒーに代表される一次産品である。特にバナナについては、二〇世紀になると米国系のユナイテッド・フルーツ・カンパニー等が北部海岸を中心に大規模なプランテーションを経営し、

ホンジュラス国内唯一の鉄道はプランテーションから港へバナナを出荷するために建設されたものである。バナナ・プランテーションにおける労働者の生活の過酷さについては、ホンジュラスの国民的作家であるラモン・アマヤ・アマドールの『Prision Verde (緑の監獄)』という作品に描き出されている。⁽²⁴⁾ また、ホンジュラスのコーヒー生産量は世界第一〇位(一七万八、〇〇〇トン)：国連食糧農業機関二〇〇四年度データ)であるが、近年、国際相場が暴落し、コーヒー生産者、およびコーヒー・プランテーションで働く人びとの生活にとって大きな痛手となっている。筆者の調査地であるコパン県では、コーヒー・プランテーションを維持していくことは、かえって赤字を増やす結果となるため、コーヒーの木を切り払ってしまった例すらある。ホンジュラスは他の中米諸国と同様、プランテーション経営をおこなう外資系企業を含む少数の大土地所有者と大多数の小作農という構造になっており、アシエンダやフィンカと呼ばれる大規模農園の被雇用者の賃金は政府の定める最低賃金を満たさない例も多く、その雇用も不安定であり、貧富の格差はきわめて大きい。

また、初等教育就学率は一一一% (二〇〇〇年) となっているが、これは標準就学年齢以外の就学者を含むためである。非識字率は都市部で男性八・九%、女性一一%とさ

れ、これは隣国グアテマラの一〇・九%、一八・五%に比べると低い数値となっているが、⁽²⁵⁾農村部ではより高い比率となることは容易に想像できる。このデータが意味することとは、七〜一二歳と定められた義務教育期間（日本の小学校に相当）に経済的理由その他のために教育を受けられなかった人びとが相当数存在することを示している。

人口構成については、スペイン系・先住民混血が九一%、先住民六%、アフリカ系二%、ヨーロッパ系一%となっており、周辺諸国のグアテマラでは混血五二%、先住民四五%、ヨーロッパ系一%、エルサルバドルでは、スペイン系・先住民八四%、ヨーロッパ系一〇%、先住民五・六%、その他〇・四%、ニカラグアでは混血七四%、ヨーロッパ系一六%、アフリカ系九%、先住民一%という構成比⁽²⁶⁾に比べれば混血メステイソの比率が非常に高いことがわかる。メキシコでは三文化広場と呼ばれるトラテロルコにメステイソ国家、メキシコの「痛ましい誕生」を記した記念碑が建てられているが、メキシコ合衆国における混血の割合は六〇%に過ぎない。まさにホンジュラスこそメステイソ国家と呼ぶべきであろう。一方、マイノリティである先住民に着目すると、二〇〇一年の国勢調査によれば、レンカが二七四、二三一人、ガリフナが四五、三二七人、チョルティが三四、四三九人、ミスキートが三三、一三三人、イスレーニヤ

が一、二、二七一人、トルパンが九、六〇六人、ペチが三、七二人、タワカが一、八四一人とされ⁽²⁷⁾、ホンジュラスはメステイソ国家であると同時に多民族多文化国家でもあることがわかる。⁽²⁸⁾

(2) 学校教育の現場で語られる歴史

前述のような歴史的経過、経済状況、そして就学状況を考慮するならば、ホンジュラスにおける「国民の歴史」形成において、Education Primaria（初等教育）と呼ばれる義務教育期間が重要な役割を果たすことは言うまでもない。メステイソ国家という民族的起源が重層化する近代に成立した国民国家においては、国家統合のシンボルが必要とされる。たとえば、メキシコの場合、それが「軍事国家アステカの男性的イメージ」であった⁽²⁹⁾。同様に先にも触れたグアテマラのエスクードや通貨単位であるケツアルがそれに当たるだろう。ホンジュラスではどうか。ホンジュラスの通貨単位もコンキスタドールを前に立ち上がったレンカの首長レンピラに由来している⁽³⁰⁾。それでは首長レンピラは国民的英雄として、国家のシンボルとして愛されているのであろうか。筆者はホンジュラスの初等教育で用いられる「社会科」の教科書を見つめる機会を得たが、そこから「国民」の創成、あるいは国家像

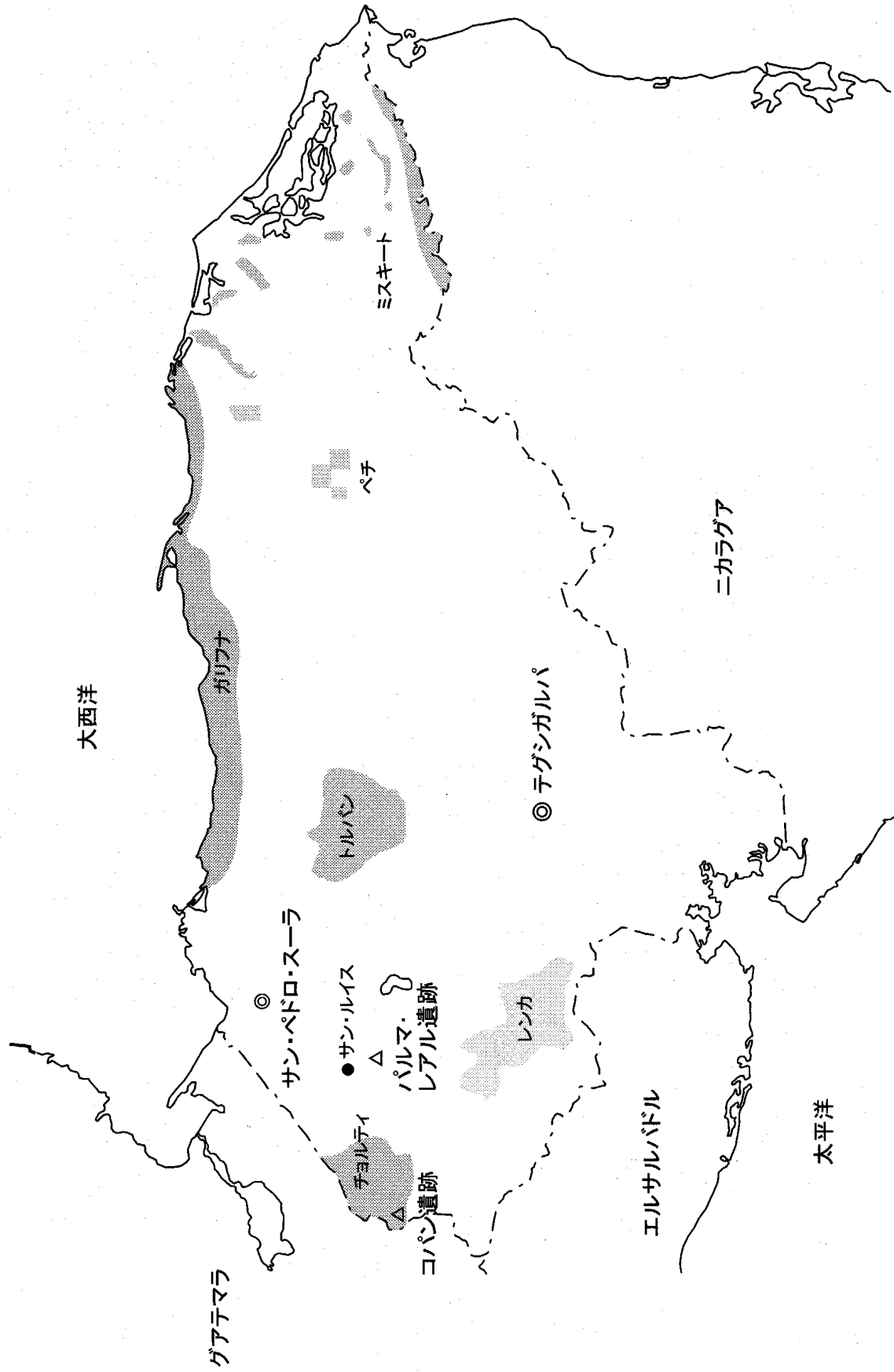


図1 ホンジュラスにおける先住民分布 (Atlas Geografico de Honduras(2004)をもとに作成)

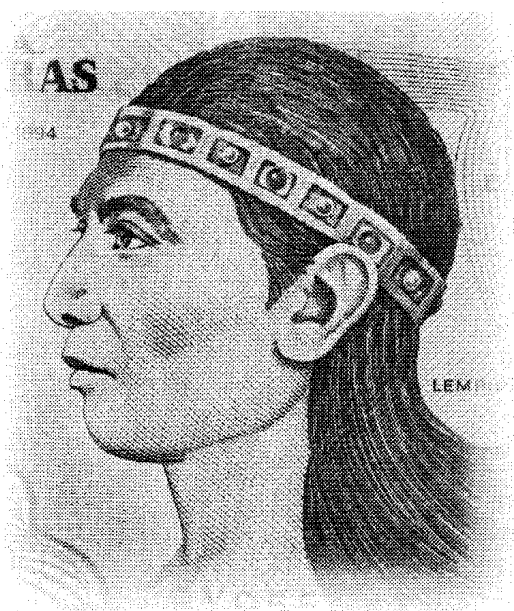


図2 1レンピーラ紙幣に描かれたレンピーラの肖像

の構築について考えることにしたい。

通常、「社会科」の中でも、歴史叙述は古い時代、すなわち現在から遠い時点から叙述を始めるのが一般的であろう。時間は連続したものであるから、現在の有り様を理解するためには有効な方法である。ところが、ホンジュラスの初等教育で用いられる一年生用の教科書では、歴史はフランススコ・モラサンから始まるのである。見開きで左頁にフランススコ・モラサン、続く右頁にレンピーラが掲載されている。アメリカ大陸の考古学研究は本稿の冒頭でも述べたようにそこに暮らした人びとの起源を明らかにし、広大な地域の各所で営まれたそれぞれの文化の諸相について新たな知見を加えつつある。七歳の子どもにそれらすべて

てを理解させようとするのに無理があることは否めないが、一年生用の教科書におけるモラサンとレンピーラの掲載順が暗示するのは、ホンジュラス共和国の歴史は一八二一年のスペインからの独立とその後の中米連邦への参加から始まる、という認識であろう。

五年生になると考古学的知見も取り入れられ、スペイン人侵入以前のアメリカ大陸には複数の民族集団が存在したことも図示される(図3)。しかし、この五年生の教科書で問題となるのは、スペイン人侵入以前の諸文化を「先進文化(cultura avanzada)」と「後進文化(cultura atrasada)」に二分している点である。「先進文化」に分類されたのは、マヤ、アステカ、インカ、そしてチブチャである。一方、「後進文化」の担い手は、アラワクやグアラニ、フェゴ島民、そして「その他大部分(muchos otros)」と規定されているのである。先進文化については、チブチャに代えてトルテカを加え、考古学的知見を交えつつ、かなり詳細な記述がなされる一方で、「後進文化」は、最後にわずかに(三分の二頁分ほど)触れられるに過ぎない³⁰。ということは、ホンジュラスにおいては、マヤ系であるチヨルティを除けば、ほかの民族集団の文化は「後進文化」に属することになり、必然的にホンジュラスの多民族性、多文化性を捨象する結果となる。

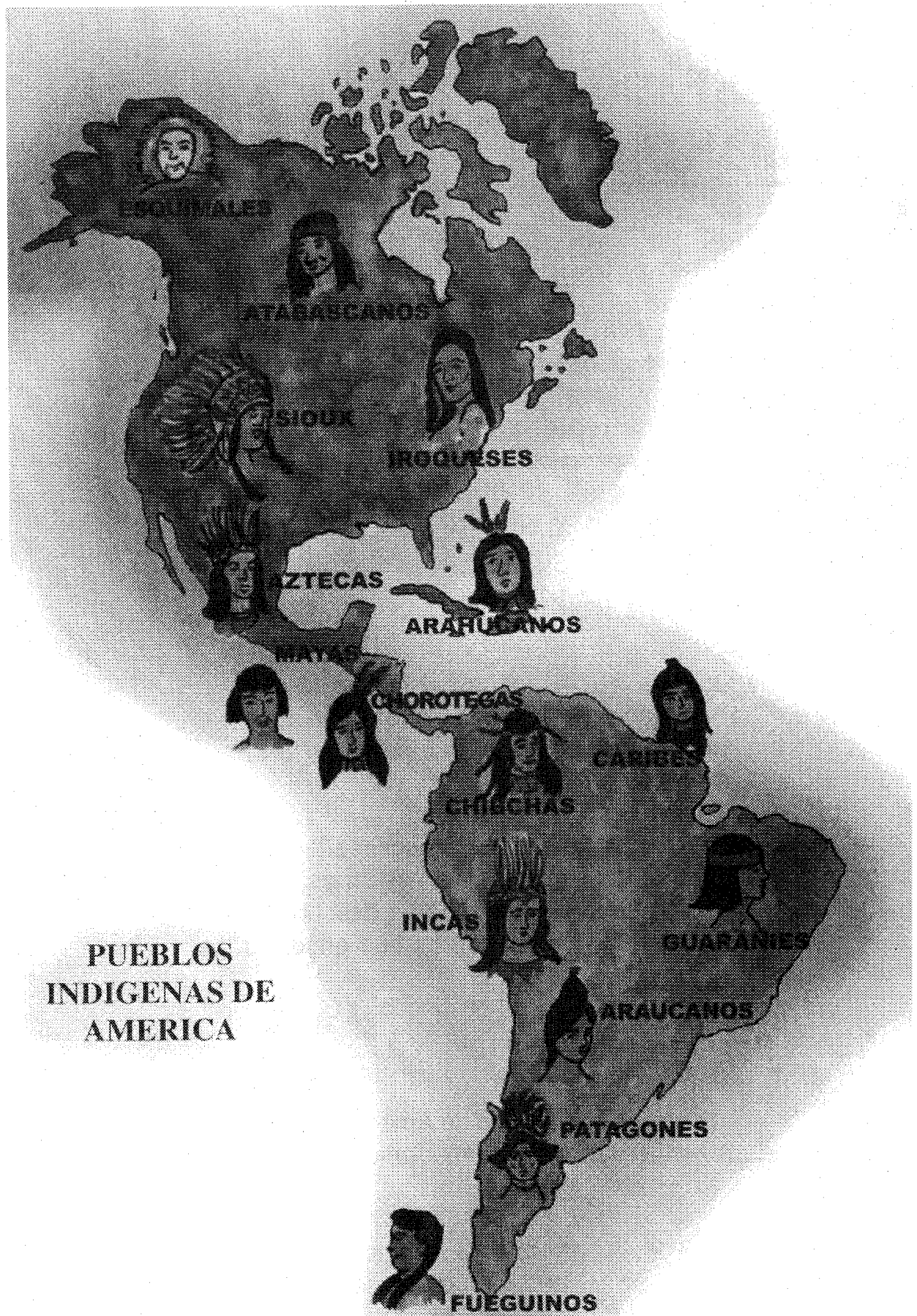


図3 多民族多文化社会アメリカを示す教科書の挿図 (Colinas O. (n.d.) p.98より)

先にファン・ガリンドが「彼ら自身の国の歴史の研究は中央アメリカの人びとに、より洗練された愛国心とその特別な性質を与えるだろう」と指摘したことを紹介したが、ホンジュラスでは自国の歴史を上述のように認識することを選択したのであった。

(3) マス・メティアにおける先住民文化遺産／資源報道
 ホンジュラスにおいては、新聞はラ・プレッサ、ティエ
 ンポ、ラ・トリブーナの三紙が有力であるが、前述の教科
 書とは別の意味で、今、先住民文化遺産／資源がどのよう
 に認識されているのかを知る手段となる。ここでは、二〇
 〇四年八月九月の記事を数点取り上げ、そこから、先住民
 文化遺産／資源のとらえられ方を見ることにしたい。

【事例1】二〇〇四年八月七日、ラ・プレッサ紙第二面
 「マヤの資源が破壊」(資料1)

サンタ・バルバラ県のパルマ・レアル遺跡において、住
 民の無知をいいことに所轄官庁が文化財 (patrimonio
 cultural) 保存の手だてを講じていない、ということをも糾
 弾する記事が掲載された。石彫の一部やメタテ、マノと呼
 ばれる製粉具の一種、それから、土器片や蝋燭立てなどの
 パルマ・レアル遺跡で表採(?)された遺物の写真も掲載
 されている。また、記事の一部は線刻礫や製粉具(メタテ、

マノ)、石彫についての解説にも充てられている。

この記事に依えて、所轄のホンジュラス国立人類学歴史
 学研究所は研究員を派遣したが、これが続報となる。

【事例2】二〇〇四年八月一〇日、ラ・プレッサ紙第一四
 面「サン・ルイスにおいてマヤ遺跡を確認」
 (資料2)

ホンジュラス国立人類学研究所の研究員が遺物や遺跡の
 調査をおこなった模様が伝えられているが、注目すべきは
 同一紙面上の囲み記事である。パルマ・レアル遺跡の帰属
 するサン・ルイスの市長のコメントが寄せられているが、
 マヤ文化の豊かさをサン・ルイスへの訪問者が理解できる
 よう、遺跡から採集された遺物を展示する博物館をこの町
 に作る構想をもっているが、考古学調査には費用がかかる
 ので支援が必要であり、この町がルート・マヤに組み込ま
 れ、観光地として発展する希望をまだ失っていない、とい
 うことである。

このパルマ・レアル遺跡をめぐる報道において留意すべ
 き点は次の三点である。まず、第一にパルマ・レアル遺跡
 は今まで放置されていたわけではなく、ラ・エントラダ
 考古学プロジェクト第一フェーズの際に登録され (SB-
 PLE600)、平面図も作られている遺跡であるにもかかわ
 らず、⁽³¹⁾新聞紙上では些かスキャンダラスに取り上げられて

OBJETIVO

Queremos trabajar y rescatar lo nuestro

"Estamos conscientes que nada ha hecho nada por el municipio, el potencial está y lo que pretendemos es aprovecharlo con ayuda del Instituto de Antropología", manifestó el viceministro Elmer Rivera.



Apertura

LA PRENSA, SABADO 7 DE AGOSTO DE 2004

RIQUEZA

"Regalamos lo que encontramos"

Armasi Lemos cuando mostraba una de las piezas de su propiedad. Manifesta que aparecen personas que ofrecen comprar las piezas y ellas saben que valen, pero no ceden.



RIQUEZAS

Un machacador para aplastar fibras, fragmentos de barro y obsidiana, esculturas con clavijas y fragmentos de esculturas son algunos de los hallazgos que están en poder de los pobladores.



INDIFERENCIA Ante el desconocimiento de los vecinos, las autoridades competentes no hacen nada por preservar el patrimonio cultural

Destruyen riqueza maya

• San Luis, Santa Bárbara. Los días transcurren como si nada en Palma Real, una aldea donde todavía las noches están llenas de misterio. Algunos habitantes esperan bajo la tenue luz de un ocote para escuchar un conjunto musical nunca visto, pero, según ellos, con los sonidos más bonitos que provienen del fondo de la tierra y en un sitio único: El barrio maya.

La música genera sentimientos encontrados en la gente, a veces les provoca temor, a otras alegría, lo común del hecho es que para nadie es indiferente, aunque cada quien relata la vivencia desde su propia perspectiva. El barrio fue bautizado con ese nombre hace 10 años por un

poblador llamado Milton Pineda. "Cuando la gente sembraba y escarbaba encontraba cartuchos de piedra, estatuas, collares, hechas, piedras con dibujos y bien trabajadas, muy parecidos a las de los mayas, entonces empezamos a llamarlo El barrio maya. La música que escuchamos por las noches vino a complementarlo todo". Los hallazgos de piezas arqueológicas siguieron ocurriendo, pero los campesinos no las apreciaban y las miraban como un objeto común, que en muchas ocasiones usaron para construir los arcos de sus viviendas o las entregaban, la mayoría de las veces por nada, a los extranjeros que llegaban al lugar.



JOTA María Lema Tróchez aún utiliza la piedra de moler que encontró hace 10 años.

"Imael tenía una piedra tallada con una cabeza y penacho dibujados, vinieron unos extranjeros y lo amenazaron diciéndole que si no entregaba la figura lo meterían a le cárcel,

inmediatamente se las dio", relata Moisés Figueroa.

En la mayoría de casas hay reliquias históricas, encontradas en el famoso barrio, piedras de moler con su mano, fragmentos dibujados, joyas, estufas, piezas de certeras y vasijas todas con un valor arqueológico inmenso.

En cada vivienda hay una anécdota. "Yo tenía dos collares que me encontré enterrados debajo de un árbol aquí en el barrio, vino una señora de San Pedro y me dijo que le gustaban y se los regalé", recuerda Anselmo Cantarero.

Otro que corrió con la misma suerte fue don Antonio Lemos, aún conserva algunas piezas tiradas en el suelo.

Don Toño encontró varios trozos entre ellos una piedra de jade, cuando visitaban su casa él alardeaba de su hallazgo. Un día llegó una visitante y le aconsejó que para que la piedra no se dañara la envolviera en un periódico y la colocara en un sitio que ella le indicó. La sorpresa fue que al siguiente día encontró únicamente la hoja de periódico.

A los 120 habitantes del lugar les gustan sus piedras y no es para menos, su belleza es impresionante. En el barrio hay más de diez mienticos que hoy están cubiertos de sembradíos de maíz, cada vez que se acerca la temporada de araf, los hallazgos de vestigios mayas resurgen.

PARTE DE LA RIQUEZA ARQUEOLÓGICA DE PALMA REAL

CURIOSIDAD

Figura de piedra antropomórfica, color negro. Los rasgos son esgrafiados, solo hay incisión, una figura poco común, según la etnóloga y antropóloga Teresa de Pástor.



HISTORIA

La piedra de moler se utilizaba desde 7.000 años antes de Cristo en los sitios donde se cultivaba maíz. Es un instrumento sorprendente que aún se sigue utilizando.



EVIDENCIA. La foto muestra un fragmento que según la antropóloga Pastor formó parte de un basamento de una escultura. Las piezas pertenecen a la Cultura Maya por la forma en que están trabajadas.



INTERÉS Un experto llegó tras un reportaje de La Prensa

Confirman ruinas mayas en San Luis

San Luis, Santa Bárbara. "Miren yo tengo una también", dijo la niña Henny Paola de sólo tres años al grupo de visitantes que llegaba a la aldea Palma Real.

La pequeña extendió la mano y mostró una hachita de piedra. La pieza fue inspeccionada por el arqueólogo mexicano Óscar Neill y se trataba nada menos que de un vestigio prehispánico elaborado con jadeita.

El fragmento regresó a su dueña y como si nada la niña lo tomó de nuevo y siguió jugando con la piedra limitándose a decir me la hallé allí, señalando al lugar donde se encuentran los montículos.

Muestras originales

Una a una y con sumo cuidado el profesional fue examinándolas y dándoles a sus propietarios la explicación correspondiente. Entre la colección de los pobladores hay hachitas prehispánicas de jadeita, cuernitas de collar del mismo material, pero de un color diferente y machacadores utilizados para elaborar papel con fibra de amate.

También vasos de piedra de más de 400 años de antigüedad, según el experto, por su color, su material y la forma.

Entre los vestigios hay fragmentos de vasijas, soportes, pedacitos de figuras mayas que servían para revestir las construcciones o templos, un objeto denominado malacate para hilar textiles de pura piedra y una pieza utilizada para repellar las paredes.

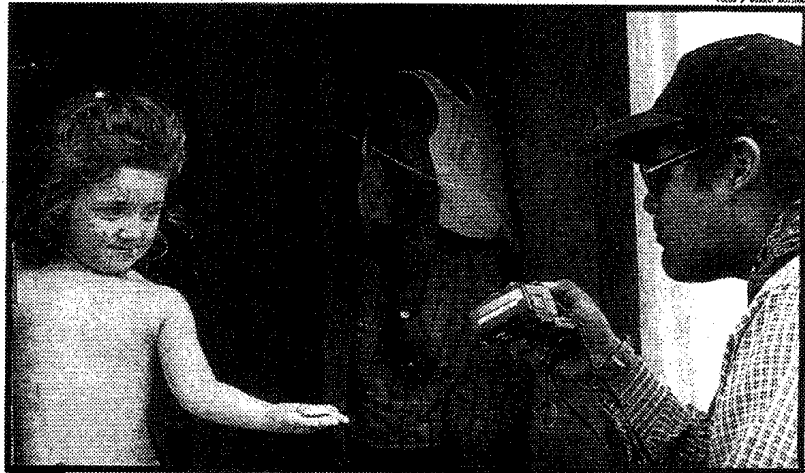
"Los ejemplares que miramos son una muestra variada de piezas antiguas coloniales, desde la llegada de los españoles en el siglo 16 hasta la independencia de Honduras, las prehispánicas, desde antes de la llegada de los españoles y fragmentos mayas". Lo que más llamó la atención fueron unos fósiles de millones de años de antigüedad, una concha marina y un caracol. "Estas piezas no son culturales sino paleontológicas, son muestras de fósiles acuáticos", explicó Neill.

La visita

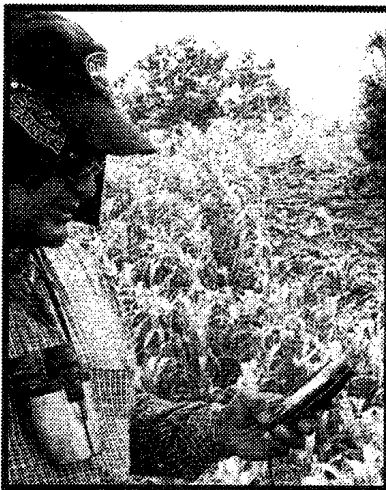
Horas después de examinar las piezas y constatar su originalidad, el antropólogo acompañado de una comitiva municipal y el equipo de La Prensa llegó a la aldea Palma Real.

La pequeña Paola salió a nuestro encuentro, algunos mostraban el reportaje de La Prensa donde salían las fotografías de las piedras que la semana anterior tenían tiradas en el solar, pero que ayer estaban limpias y guardadas. Ella enseñó la jadeita, su juguete.

El objetivo de la visita era recorrer la propiedad donde están ubicados los montículos y don-



La niña Henny Paola cuando mostraba la hachita de jadeita al arqueólogo.



El arqueólogo mexicano Óscar Neill en la inspección.

de los pobladores miran luces misteriosas y escuchan el conjunto de sonidos inigualables. Neill utilizando un sistema de geoposicionamiento satelital ubió las ciudades cercanas y las vías de acceso. La presencia del especialista hizo que los pobladores llegaran a ver qué pasaba. Por varias horas permaneció inspeccionando el lugar. "El sitio arqueológico Palma Real es uno de los más representativos de la zona del accidente del

país, fue registrado en la década de los ochenta por una misión japonesa de la Agencia de Cooperación Internacional de Japón, Jica", dijo. Explicó que fue investigado sólo superficialmente, levantaron un plano topográfico y fue considerado un lugar muy importante. "El área presenta una complejidad y se puede catalogar como categoría tres y cuatro otorgada para un territorio grande que presenta plazas mayas, montículos grandes como de

dos o tres metros de altura", explicó.

Recomendaciones

Los representantes del Instituto Nacional de Antropología e Historia explicaron que los pobladores deben de cuidar el patrimonio porque es una riqueza significativa.

"Los habitantes deben evitar a toda costa que alguien de fuera venga a saquearlos o destruirlos, sobre todo el robo de piezas arqueológicas". En la inspec-

ción se constató que existe remoción de tierra, afectación del lugar y específicamente se ha dado una especie de curiosidad de los pobladores por tratar de ver lo que hay debajo de la capa de tierra de los montículos, detalló el investigador.

Tras el recorrido se presentará un informe detallado a la dirección del instituto y se tomarán los correctivos del caso.

Unidad García de Escobar La Prensa
 gencia@laprensa.hn

INTERÉS Y MALIZADO	
1 REPORTAJE DE LA PRENSA DESPERTÓ INTERÉS	2 ENCONTRARON RESTOS DE CULTURA MAYA
Los representantes del IIAH, autoridades municipales y los pobladores de San Luis alabaron la labor realizada por el diario de mayor circulación en el país.	El experto inspeccionó las piezas y constató su originalidad. Los vecinos de San Luis sacaron todas las muestras arqueológicas que hoy guardan como reliquias.

Necesitamos apoyo para ser municipio turístico

El alcalde de San Luis, Santa Bárbara, Freddy Rapalo, indicó que la intención es elaborar un plan estratégico con ayuda de estudiantes de turismo de la Universidad Tecnológica de Honduras, y presentarlo para convertir al municipio en un sitio arqueológico y turístico. "Con las piezas que se han sacado de las ruinas tratamos de conformar un museo en el municipio para que los visitantes co-

nozcan las riquezas de la cultura maya". Rapalo manifestó que están conscientes que hay descuido por parte de las autoridades municipales porque aunque salieron de la existencia nadie se ha interesado por emprender un proyecto. Expresó que saben que las excavaciones arqueológicas son caras, pero no pierden las esperanzas de un día poder formar parte de la ruta maya.

資料2 「サン・ルイスにおけるマヤ遺跡の存在確認」を伝える記事（ラ・プレサ紙2004年8月10日）

いる。ただし、インスペクションという点では、管轄する国立人類学歴史学研究所の予算や人員の問題があり、十分な対応ができていないということも事実である。これは、ホンジュラス国内のほかの遺跡でも同様である。第二にパルマ・レアル遺跡がマヤの人びとの遺跡かどうかという点である。パルマ・レアル遺跡を含むサンタ・バルバラ県は南東マヤ地域の外縁部にあたり、マヤと非マヤが交錯する地域である。現在までの調査では、確実にマヤの人びとが残したものか、あるいは、マヤの人びとも交流をもっていたほかの民族集団が残した遺跡であるかを断定することはできないのである。第三に、サン・ルイス市長のコメントにあるように、現地の人びとは考古遺跡が観光資源となりうる可能性を認識しているということである。

【事例3】二〇〇四年九月一日、テイエンポ紙第一四面

「マヤの民芸品からマイアミに送られようとした麻薬を発見」(資料3)

同様の記事はラ・プレッサ紙にも掲載されているが、現代の中米地域でも大きな社会問題となっている麻薬密輸に関する記事である。グアテマラとの国境に位置するエル・フロリドからサン・ペドロ・スーラを経由してマイアミ向けに送られた荷物の中に「マヤの仮面」のレプリカがあり、その中に二五キロものコカインが隠されていた、という事

件である。コカインが隠されていた「マヤの仮面」のレプリカは記事で、写真で示されているが、明らかにマヤの様式からは逸脱したものであり、「マヤの民芸品」あるいは「マヤの仮面」とは言い難いだろう。この事件報道が示しているのは、先住民的なるもの「マヤ」という構造である。これはパルマ・レアルの報道とも共通しており、マス・メディアでは、古きものはすべてマヤとして表象される、ということである。教科書と同じく、マス・メディアもマイノリティである先住民文化をマヤというキーワードで囲い込んでしまっているのである。

ただし、ホンジュラスにおけるマイノリティの中でも例外があるとすれば、ガリフナである。ガリフナとは一七世紀、アフリカから連れてこられた奴隷が、バルバドスのプランテーションから脱走したり、難破の結果、セントヴィセント島やドミニカへ逃れ、南米起源のカリブと混血した人びとである。彼らは、イギリスの進出により、セントヴィセント島を追放され、一八世紀末にホンジュラス領のロアタン島、それから、本土のトルヒーヨへ運ばれ、⁽³²⁾現在の分布はホンジュラス北部海岸を中心にベリーズ、ニカラグアへと広がっている。このガリフナの人びとについては新聞でもしばしば取り上げられているが、それは、彼らの民族音楽や民族舞踊によるところが大きい。たとえば、二

En artesanías mayas encuentran drogas que enviaban a Miami

La Fiscalía informó anoche que son cinco mascarones mayas en cuyo interior encontraron supuesta cocaína, cuyo peso será conocido hasta hoy

SAN PEDRO SULA



Dos agentes de la DGIC, muestran dos de los cinco mascarones mayas en cuyo interior se encontró la presunta droga.

La Fiscalía Contra el Crimen Organizado incautó anoche en la empresa de correos Urgente Express, varios mascarones mayas, en cuyo interior transportaban supuesta cocaína, los cuales iban con destino a Miami, Estados Unidos.

Hasta anoche la Fiscalía no había realizado las pruebas de campo ni confirmado el peso de la presunta droga, actividades que se realizarán hoy en Medicina Forense.

El operativo fue realizado por agentes de la Dirección General de Investigación Criminal (DGIC), Policía Preventiva y coordinado por la fiscal Karen Martínez, quien confirmó la existencia de sustancias ilícitas en el interior de las artesanías.

El jefe de la DGIC, Jaime Varela, dijo que los perros amestrados detectaron la sustancia, sin embargo, no se atrevió a confirmar si se trataba de cocaína o heroína.

Karen Martínez confirmó anoche que incautaron cinco mascarones mayas de piedra, cuyo interior es hueco, pero ese espacio es ocupado por paquetes envueltos en cinta adhesiva color gris, supuestamente droga.

La fiscal explicó anoche que "la correspondencia" debió salir por el aeropuerto internacional de San Pedro Sula, con destino a Miami, a las seis de la tarde, pero el traslado se impidió tras el operativo iniciado a las cinco de la tarde.

Cada mascarón tiene unas 25 pulgadas de alto, por 12 de ancho y unas cinco pulgadas de espesor y su peso oscila entre las 40 y 50 libras, sin embargo se explicó que ese no es el peso de la droga, ya que las piezas son de piedra.

También se encontraban dentro del lote varias estelas de unas diez pulgadas de alto, varios escudos y otras arte-

sanías propias del occidente del país.

Martínez explicó que el paquete fue depositado ayer por la tarde en la oficina principal de Urgente Express, situada en el barrio Paz Barahona y la Avenida Circunvalación y que la persona que lo hizo venía con procedencia de Florida, Copán, sin embargo, no reveló el nombre por razones investigativas.

La Fiscalía ordenó que el gerente de la empresa, de origen salvadoreño, fuera detenido para investigación. Se informó que la caja de cartón donde se transportaba la mercancía estaba en su oficina y uno de los mascarones estaba fuera del paquete.

Jaime Varela dijo que por la ruta de la droga, podrían presumir que se trata del cártel de Occidente. Dijo que está en proceso de investigación determinar si es la primera vez

que se realizaba un embarque de ese tipo.

La Fiscalía ordenó el comiso de la documentación de ese paquete, pero no descartó la intervención a los registros de la empresa de encomiendas.

Será hasta hoy que Medicina Forense dé un dictamen sobre el tipo de droga, cantidad y calidad, sin embargo la Fiscalía desde anoche comenzó a tomar declaración a los empleados que se encontraban laborando al momento del comiso.

Fuentes ligadas a la investigación dijeron que podía tratarse de una cantidad entre los 1 y 15 kilos de presunta cocaína.

Karen Aguilar dijo que ellos recibieron información sobre el modus operandi, por lo que se trasladaron al edificio de la empresa de correos y solicitaron autorización para realizar el registro del inmueble.

〇〇四年八月二〇日のラ・プレンス紙にはガリフナの人びとが Casa de Cultura、彼らの音楽や踊りを観光客に見せるための観光センター建設を政府に要求する、という記事が載っている。彼らガリフナの音楽や踊り、そして言語はベリーズでユネスコにより二〇〇一年「人類の口承および無形遺産の傑作」として登録されており、ユネスコという「外部権威」による「価値付け」がなされていることとも無縁ではなからう。

5. 応用考古学の可能性

これまで述べてきたように、ホンジュラスでは、スペイン人による植民地化の前後を境に歴史意識の断絶が見られる。それは、スペイン人の侵入以前に在地の文化が衰退傾向にあったことや植民地時代初期に先住民人口が激減したため、メステイソ国家としての道を歩まざるを得なかったこととも深く関係しているだろう。そのため、現状ではホンジュラスにおいて、スペイン人侵入以前の歴史は、国家の歴史とは別の位相として語られ、マイノリティである先住民集団の大半は国家の歴史から黙殺されているのである。しかし、その一方で、先住民文化遺産／資源は外国人観光客を目当てにした、今や重要な国家の収入源となつて

いる現実がある。手元に在日ホンジュラス大使館発行の観光パンフレットがあるが、そこには「一つの小さな国、三つの大きな世界」というキャッチコピーのもと、豊かな自然、マヤ遺跡、そしてカリブ海の島々とガリフナという「観光の目玉」が豊富なカラー写真とともに紹介されている。あるいは、米州開発銀行ムンドマヤプログラムでは、「マヤ地域に存在する可能性はすばらしいものである。資源と土地の正しい利用、考古学的資源および観光資源の適正な開発、カルチャーツーリズム、エコツーリズムの正しいなる潜在的可能性などを考慮すべき」とされている⁽³⁴⁾。

その行動指針の一つとして「考古学的資源の復元と保全」が挙げられているが、考古学研究はこの点において、テクニカルな面での貢献・協力をすることが可能である。皮肉にも国家の歴史から黙殺され、後進性のシンボルともみなされた先住民文化遺産／資源が、現代において貴重な外貨収入をもたらすことになったのである。このパラドクスは開発が遅れたため、結果的に自然環境が保全された地域がエコツーリズムの対象となっていることと同様である。したがって、ホンジュラスにおいても、先住民文化遺産／資源を活用するカルチャーツーリズム、考古学ツーリズムに際しては、エコツーリズムのために開発されたスキームが参考になるだろう⁽³⁵⁾。しかし、エコツーリズムでは「資源価

「資源価値」の再認識、再発見というプロセスを経るわけであるが、カルチャーツーリズム、考古学ツーリズムの場合は、「資源価値」というくりだけではなく、民族の記憶という点からエスニックアイデンティティの問題と不可分である点の問題となる。たとえば、「資源価値」という点に基づく開発であるならば、ムンドマヤプログラムで設定されるように「すでに開発されている観光地が多く存在する。これらをムンドマヤルートへの入り口として活用する」こと⁽³⁶⁾によって、特定の遺跡を観光拠点ハブとすることができ、ホンジュラスの場合は、コパン遺跡がこのハブに該当するが、すでに年間一〇万人の観光客を迎えるコパン遺跡の場合、宿泊施設などのインフラが限界に達している。これ以上のカルチャーツーリズム、考古学ツーリズムの拡大はサービスの低下などマイナス面が懸念される。これを回避するためには、新たな拠点の開発が必要不可欠であるにもかかわらず、たとえば、本稿で触れたパルマ・レアル遺跡は「資源価値」が低いと見なされ、開発、あるいは投資の対象とはなり得ないのである。実はこうした体質は、初等教育で用いられる教科書において「先進文化」と「後進文化」とに切り分ける、あるいは、マヤやガリフナの文化資源／遺産には「資源価値」を見いだし、その他の民族集団の場合には国家像の生成からも取りこぼしてしまうという構造を

再生産しているのである。だからこそ、他者からのまなざしであっても、考古学研究者という「外部権威者」による「価値付け」を発信し続けなければ、援助や開発、自立という名目のもと、エスニックマイノリティが彼らの民族の記憶に「資源価値」を見いだす機会を永遠に奪ってしまうことになるのである。したがって、考古学研究成果は、彼らの失われた歴史を取り戻すための一つの手段となりうるだろう。しかし、それらが国家の歴史、国民の歴史としてどのように組み込まれ、再編成されていくのかについては、彼ら自身に委ねられるべきであることを前提に当該地域での考古学研究は進められなければならないのである。

〔付記〕本稿は、平成一五年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(二))「近代における「考古学」の役割の比較研究―その本質的表象と政治的境界の関連を軸に」(課題番号 15320079)の成果の一部である。研究代表者の余語琢磨氏(早稲田大学人間科学部)をはじめ、研究分担者である佐々木幹雄氏(早稲田大学学芸高等学院)、谷川章雄氏(早稲田大学人間科学部)、小川英文氏(東京外国語大学)、高梨修氏(名瀬市立博物館)には貴重なご意見、ご教示を賜りました。ここに記して感謝いたします。

註

- (1) Dillehay, Thomas D. (2000) *The Settlement of Americas*. Basic Books, New York.
- (2) ジェームズ・D・ワトソンの『DNA』(講談社、二〇〇三年)によれば、アメリカ先住民のY染色体の種類から、アメリカ大陸に一家族程度の集団がわずかに回やって来たのが、現在のアメリカ先住民の祖ということになる(316-317頁)。
- (3) エドゥアルド・ガレアーノ(大久保光夫訳)『ラテンアメリカ五百年 収奪された大地』(新評論、一九八六年)。
- (4) 註2文献、320-321頁。
- (5) サパティスタ民族解放軍(太田昌国・小林致広編訳)『もう、たくさんだ!』(現代企画室、一九九五年)。
- (6) 「応用考古学」と称した場合、たとえば、東海大学文学部歴史学科考古学専攻では「考古学に近接した他学問分野の成果を考古学研究の中に活かす試み」(http://prog.pr.tokai.ac.jp/tokai/TKpfacultyInfo?p_gakubuc=2130&p_shoc=851650&p_sisetuc=02)と位置づけられているが、本稿の「応用考古学」とは人類学で言うところの「応用人類学」に近似するものである。
- (7) 青木康征『完訳 コロンブス航海誌』(平凡社、一九九三年)。
- (8) デイヴィッド・ハワース(塩野崎宏訳)『パナマ地峡秘史』(リポレポート、一九九四年)。
- (9) 杓谷茂樹「強者どもが夢のあと」『エルサルバドル、ホ先住民文化遺産／資源の表象
ンジュラス、ニカラグアを知るための45章』(田中高編著)、117-121頁(明石書店、二〇〇四年)。
- (10) 註7文献433頁。コロン一行が出会ったのが「マヤ人」であるかどうかについては、疑問視する意見もある。
- (11) 註9文献、119-121頁。
- (12) 寿里順平『中米Ⅱ干渉と分断の軌跡』202-203頁(東洋書店、一九九一年)。
- (13) 一五二三年、キチェルマヤの首長テクン・ウマンは、征服者ペドロ・アルバラードとの戦いに敗れる。その際の言い伝えとして、斃れたテクン・ウマンの胸にケツアルが止まり、テクン・ウマンの血を浴びて、ケツアルの胸の羽は赤くなった、とされている。ケツアルは、中米地域の雲霧林に生息するキヌバネドリ目の鳥で、特にオスはエメラルドグリーンの長い尾羽をもち、スペイン人の到来以前、マヤをはじめとしたメソアメリカ各地の社会でその尾羽は王や貴族のための装飾品として珍重された。
- (14) ベルナル・ディーアス・デル・カステイリョ(小林一宏訳)『メキシコ征服記1 大航海時代叢書エクストラ・シリーズ3』350-351頁(岩波書店、一九八六年)。
- (15) 前掲書、347頁。
- (16) 前掲書、364頁。
- (17) 前掲書、362-363頁。
- (18) 落合一泰「政治的資源としてのインディオ文明—十九—二十世紀メキシコにおける文化的植民地主義と自己成型」『文化の生産』、138-158頁(ドメス出版、一九九九年)。

- (19) デイエゴ・デ・ランダ (林屋永吉訳、増田義郎注)「ユカタン事物記」『ヌエバ・エスパニヤ報告書他 大航海時代叢書(第II期)13』(岩波書店、一九八二年)所収、260-261頁。
- (20) Morley, Sylvanus G. (1920) *The Inscription at Copan*. pp.541-542. The Carnegie Institution of Washington. Washington, D.C.
- (21) *ibid.* pp.25-26.
- (22) *ibid.* p.602.
- (23) Instituto Hondureño de Antropología e Historia (2005) *Plan de Manejo Zona Arqueológica de Copán* 2005. Tegucigalpa. (現在までのロビンソンにおける考古学調査の年譜が示されているが、「科学的考古学」の時代＝二〇世紀に入っておこなわれた主な考古学プロジェクトは以下の通りである。
- 1978-80: Claude Baudéz/*Proyecto Arqueológico Copán, Primera Fase* (PAC I)
- 1980-85: Wiliam Sanders/*Proyecto Arqueológico Copán, Segunda Fase* (PAC II)
- 1985: William and Barbara Fash/*Proyecto Mosaicos de Copán*
- 1986: William and Barbara Fash/*Proyecto de la Escalinata Jeroglífica*
- 1989-1995: William Fash/*Proyecto Arqueológico Acrópolis de Copán* (PAAC)
- 1989: Robert Sharer/*Programa de Investigación de la Acrópolis Temprana* (PIAT)
- 1990: E. Willys Andrews/*Proyecto Acrópolis Sur*
- 1997-2001: Seiichi Nakamura/*Programa Integral de Conservación del Parque Arqueológico Copán* (PICPAC)
- 1998: René Viel/*Proyecto Herencia Maya Prehispánica*
- 2003: Seiichi Nakamura/*Proyecto Arqueológico Copán* (PROARCO)
- 2004: Allan Maca/*Proyecto Arqueológico de la Planificación de Antigua Copán* (PAPAC)
- 上掲のほとんどもはアメリカ(合衆国)人研究者がプロジェクトディレクターを務めており、そのほかにフランス人(ボーデとヴィエル)、日本人(中村誠一)がディレクターとなるケースがある。ホンジュラス人による調査はハスス・ヌニェス・チンチャー(1963)、リカルド・アグルシアによる神殿91の発掘・修復(1994-96)、ホルク・ラモスによる Proyecto de Reconstrucción Iconografica del Templo 16, Primera Temporada (PRIT-16) などである。この傾向はセレンシヨラス国区の他地域における考古学調査でも同様。
- (24) Amaya Amador, Ramón (1993) *Prisión Verde* (Séptima Edición). Editorial RAMON AMAYA AMADOR, Comayagua. ※初版は一九五〇年
- (25) 外務省中南米局監修『中南米諸国便覧 二〇〇三年版』23頁(社団法人ラテン・アメリカ協会、二〇〇四年)
- (26) 前掲書 86、96、96、102頁。

- (27) anon. (2004) *Atlas Geográfico de Honduras*. Ediciones Ramsés. Tegucigalpa.
- (28) ホンジュラスの先住民について Rivas, Ramón D. (1993) *Pueblos Indígenas y Garífuna de Honduras*. Editorial Gyamuras. Tegucigalpa. 222頁。
- (29) 註18文献、145頁。
- (30) Colindres O., Ramiro (ed.) n.d. *Estudios Sociales 5*. Graficentro Editores. Tegucigalpa.
- (31) Nakamura, Seichi et al. (eds.) (1991) *Investigaciones Arqueológicas en la Región de La Entrada*. Servicio de Voluntarios Japoneses para Cooperación con el Extranjero, Instituto Hondureño de Antropología e Historia. San Pedro Sula.
- (32) 註28文献、pp.258-261.
- (33) 註12文献。197頁によれば、一二〇万人いた先住民が一五九〇年には一八、〇〇〇人まで減少したという。
- (34) Inter-American development Bank n.d. *Mundo Maya Sustainable Development Program*.
- (35) 石森秀三「21世紀は「自立的観光の時代」『科学』二〇〇二年七月号706-710頁。
○二年七月号706-710頁。
- (36) 註34資料、p.ii.